



昭和58年 9月3日

マスコミ情報シリーズ(45)

戦後社会の大転換期

週刊誌記者
匿名座談会

参院選結果、各党とも内部亀裂
社会党は末期的症状
社会党には売る商品がない

「守る」社会党では、飛鳥田でも石橋でも変わらない

S 参院選は、保守の自民党が三五・三%、中道の公明は二四・一%、革新の社共が二五・六%(比例区)という結果になりましたね。革新の社会党の凋落がはげしいので、飛鳥田が辞意を表明し、石橋政嗣を委員長におすことによって、党の立て直しを狙っていますが、成功しますかね。また各党は、参院選の結果をどう受けとめていますか。

N 数字を別にしても、今回の参院選で勝った政党はなかったのではないのか。各党とも相当傷が深かったようで、民社党でも、同盟内に強いしこりができたようです。

社会党は以前から、凋落が言われていましたが、今まで委員長の座に固執してきた飛鳥田一雄が辞めざるをえないくらい、彼と中執、総評との溝が深くなりましたね。

公明党も、選挙結果には、大満足とはいえないようです。どこがどういけないかとい

十六年)と六たび制し、また五十五年、五十六年には年間獲得賞金一億円突破(スポーツ選手としては初)を成し遂げて、世間をアツといわせたものの、「ミスター競輪」と冠されて、マスコミにもしばしば顔を出す存在になったのも、ちょうどこの頃。中野のテレビ、ラジオへの登場が、競輪そのもののPRに、どれほど役立ったことか……。

しかし、頭風満帆でここまで来た中野だが所詮は我々同様、やはり人の子。五十七年、つまり昨年、国内における本業の競輪で、四度も落車した中野は、極めて不本意なシーズンを送るハメに陥る。特別競輪一つも制覇することができず、獲得賞金も七千万円(第三位)がやっとと、デビュー以来、最大のピンチを迎えた。イギリスのレスターで行なわれた世界選でも、再度シングルと決勝でぶつかり、一本目両者相互接触により再発走となったが、これとて一度は中野の反則負けの裁定が下されたくらいだし、再発走後もシングルトンの逃げ切りを許し、一本先取されるなど大苦戦。結局、二本目で中野がシングルトンの逃げをG前差した時に、シングルトンが防戦の意味で右肘を張ったために、自爆の落車——という事故が起き(右鎖

骨々折でシングルトンは三本目を棄権)、はからずも「V6」の世界タイ記録(一九三二年から一九三七年にかけて、ベルギーのJ・シニールンが記録)誕生となった次第だが、全くもって過去に経験したこともないほどの難産の末の優勝、いわば「ヒヤヒヤ防衛」というやつであった。

そして「V7」世界初の期待を一身に集める今年の世界選——。勿論、昨年のこの大苦戦した戦いぶりが重要な鍵を握っていることはいまでもない。つまり「苦境を乗り切った精神面での収穫ははかり知れないくらい大きい筈」という見方をするか「命からがらの優勝とは中野らしくない。終焉は近いゾ」との見方をするかで、その展望が根本からして大きく変わってしまうというわけだ。

ただ、筆者としては、もし二者択一を迫られるなら、断然前者だと、声を大にしたい。確かに「V6」以降も、国内のタイトルに縁のない中野ではあるが、そうはいっても競輪祭、ダービー、高松宮杯で各々②、②、③着と健闘し「王者」として、レースの主役を演じきっていたし、上り目こそないにしても、反面、頭脳作戦がその分をカバーしている現状だけに、即脚力低下と考えるのは早計とい

うもの。しかも、調子は昨年と較べて雲泥の差。七月中旬の地元・久留米記念競輪でも①①着(しかも決勝は11秒3の好時計で逃げ切り勝ち)。さすがに中野だ、と思わせる動きだったし、既に今年の獲得賞金も、七月二十一日現在六千万円強と、またまた一億円ペース。

九人の選手で走る「障害物競走」である競輪でさえ、この素軽さであるから、サンの勝負で、持ち味の「ダッシュ力」が一〇〇%生かされるスクラッチならば、更に中野の剛脚が冴えわたるのは当然だ。ちなみに、五月に函館でプロ・アマの強豪を集めて開催された『全プロ大会』でも、中野はプロスクラッチ部門で、あっさり優勝を飾っている。

「王者交代劇」がこの先訪れるのは、まぎれもない事実だろうが、こうした中野の好調を考えた場合、もはや「V7」はおろか、「V8」「V9」の期待までかろうというもの。特に今年の場合、最大の強敵が、再三手合わせしたY・カール(フランス)クラスというから「V7」は、ほぼ決定ではないか。世界選・プロスクラッチの決勝は八月二十八日——。「スーパーマン・中野浩一」の華麗なる疾走に、大いに期待したい。

中国の主権と会ったり、ロックフェナリーが中国に行ったりした時期がありました。これは自動車を買ったり、ホテルを建てに行ったりではなく、衛星関係の交渉をおこなっていたのです。特にフォードは最近の宇宙技術をもっていますからね。

K ソフトの技術力はアメリカはものすごく高い。これは経験しないと蓄積できないのですからね。

O レーガンは十一月に来日しますが、日本に来るのが目的ではなく、本当は台湾ではないか。レーガンにとっては、日本より、台湾を極東の対ソの防衛基地として使用していく考えではないのか。そのためには、まず台湾に話をつけ、次はフィリピン、韓国という三国の対ソ防衛ラインをつくらうとしております。問題は、この防衛ラインに対して、日本はどれだけ協力するかということです。つまり、レーガンは、中曽根に、日本はいかなる防衛分担ができるかを、日本に膝づめにくるのが、レーガン訪日の一番の目的ですよ。

これに対して、日本はアメリカと中国との関係から、アメリカはそこまでふみきれないだろうと甘くみているが、レーガンは来年の大統領選をふまえて、はっきり、アメリカの

要求をもちだしてくるだろう。そのためには、どこをどうしなくてはいけないというアメリカの極東政策の中で、日本は逆に切り捨てられる立場にあるのです。つまりアメリカからみると日本がこれ以上協力しないのであれば、日本を切り捨てるしかない。そして台湾、フィリピン、韓国のラインをはっきり押さなければ、日本はあまり重要ではない。しかしこのまま、日本の経済力を無視するわけにもいかないのも、もう一度、レーガンが来日して、おまえはどういう腹なのかを、ヤス（中曽根）にせまりにくるのですよ。

しかしどこまでアメリカが強硬に出てくるかは別にして、アメリカの戦略の中には、今言ったことが確かにあります。日本は安保条約で、アメリカの傘の下にあり、アメリカはいつまでも日本を利用する立場にあると、信じきっている日本人も多いが、アメリカの政策は徐々に変わりつつあります。

これに日本が早く気づいて、その時に応じて、アメリカに応じていかないと、日本だけがとり残されることになりかねない。

S 米韓、米台、米比の防衛条約は、ある意味では平等で、相互協力条約ですが、日米安保だけは、アメリカに一方的義務を課して

集まっています。

戦後タブーへの論争と起れ

吉田政治のプラス面とマイナスマ

江藤淳の提示した問題は何か

S 論壇で久方ぶりに江藤淳の発言が大問題になっています。彼は今日の日本人の防衛、憲法に対する誤った考え方は、戦後形成した吉田茂の政治に根を發しているのだといい、そして米国の初期対日政策が、昭和二十四五年頃から、変わりはじめたということ根拠にして、いろいろの発言をしています。

ここ二三年來、高坂正堯、猪木正道等が吉田の自伝を書いたように、吉田ブームは一時期ありました。そこでは戦後政治に対する吉田が果たした役割を、プラスイメージとしてとらえています。ところが江藤は逆なのです。戦後、吉田がいまいちなことをやってきた結果、確かに日本の経済繁栄にはプラスになった面もあるが、日本人の物の考え方をまったく墮落させてしまった、だから吉田政治は、必ずしもプラスばかりではない。ここで一度、戦後の歴史を考え直さなければならぬ、ということを行っています。

いる不平等条約です。アメリカは今まで日本憲法をよく理解して、経済協力だけはしてくれということで、軍備については、あまり言明してこなかったが、ソビエトの軍艦に対抗するために、アメリカ一國では、手におえない時代が来たので、日本が平等条約を結ぶ気がないのなら、三国との結びつきを強化し日本を切り捨てても、よいとしているのではないですか。台湾への武器援助も、中国の反対にもかかわらず、続行されているのは、その証です。

N 日本の役割が、今までの象徴的なものだけでは、本当にアメリカとしては困るという所まできているのです。レーガンがタカ派だから、日本に強くできているというのではない。むしろレーガンはタカ派にみえるが、日本には心情的には、親切な方ではないのか。にもかかわらず強硬なことを言わざるをえないところに、日米関係がきているのです。これは状況のつきあいの結果であって、誰が引き上げているのでもなく、日本をとりまく状況がシビアになってきているのです。

S 中国はホンコンに対して、相当、柔軟になってきているということは、中国の国内状況が依然苦しいのではないかな。

N 自民党で改憲論、教科書見直し論がでている一方、論壇では、改憲が護憲か、戦後民主主義の是非、天皇制の今後が争われてきております。もう少し深く言うと、国家の統合理論は何なのか、これは敗戦によって失われたものか、日教組が失なわせたものか、戦後憲法がいけないのか、もしいけないとすれば、これは占領軍のせいなのか、それとも遠く明治維新そのものがよくないのか、いろいろな説があります。では改憲論者がいう、戦前に戻れとなると、戦前はそんなに良かったかという議論も論壇には、でているのです。

戦後論壇は、各分野での保守対革新の対決でしたが、ほぼ革新が全敗し、今では保守同士の間になった。この保守同士の争いで、戦後民主主義を肯定的に受けとめようではないかという意見と、そうではない占領政策で日本の墮落と受けとめるべきだという説があります。後者は江藤をはじめとする改憲派につながっていくのですが、これもまた総論では一致、しかし、各論に入っていくと、つまり防衛問題に入っていくと、清水幾太郎のように、防衛についてももっとこまかくやるべきだ、日本の軍備はこういうことだという、具体論まで出すべき派に入るか、そうではなく

て、戦後憲法の前文の検討をもう一度やり直そうではないかというように、こまかい所に入ると、意見は分かれてしまうのです。これは別言すれば、保守文化人の危機意識だと思ふのです。

なぜこのよう危機意識がでてきたのかは、Xデイ、つまり来たるべき昭和の終りに対して文化人層の間には、国家の統合理論を失うのではないかという一種の危機感があるのです。具体的に言うと、皇太子に対する不信感があり、現皇太子が天皇になると、現天皇制国家秩序はもう守り切れないのではないかと不安です。今上天皇がいる限り、戦前の延長線上で、守ってきた保守が言う国家統合理論が、崩壊するのではないかという危機感からひるがえって、ここで国家の土台をしめなおそうではないかということが暗黙の了解として、あると思うのです。

江藤は死後の構造というが、ひそかに語られていた、つまり、この問題をどうするかということを意識的に語り合った問題なのか、または個人的に、みんなが共通に、時代認識としてもちはじめたのか、このところが、江藤が言う論争の論点でもあります。そういう徒党が、保守内部にありうるのか、ないのかというところが、江藤の論文が正しいか、正しくないかの是非論にもなっています。

文化財団が組織する関西文化人および、若手文化人が論壇を占拠していることは事実です。しかしこれが意図的な目的に向って、進んでいるかという、はたしてどうか。「日本の主張」のようなシンポジウムをやりながら、日本の問題について根本的に考えようという姿勢をもっていることは確かですが。

S 江藤は吉田政治と、それ以後の政治は養子政治である、この際、嫡子はちゃんとしてくなくてはいいという言い方をしています。N 江藤が今回批判したのは、山崎正和、粕谷一希、中嶋嶺雄、猪木正道です。猪木とサントリー文化財団の理事である高坂正堯が吉田論を書いています。

吉田論を書く人は、ある意味で、今の憲法を部分的にでも肯定し、戦後民主主義をプラスに評価しようとする側です。これに対して江藤は、どういう動機であれ、これに斬りつけたのは、うがった見方をすれば、保守内部の改憲論派と、護憲派の丁々発止であるという構造と考えてもいいのではないかと。Y 基本的には保守側の危機感があると思

いますが、現象的には、論壇で保守対革新の争いで、保守は連勝して自信をもっていた。そしてふといろいろなところをながめてみると、結局、自分達が発表する場所に、まだ左翼のなごりがある。たとえば、新聞の論壇や総合誌にも、現実論に近づきながら左翼理論を全部とりはらっていない人達が、そこを占領している。これは、けしからん、しかもそれを徒党を組んでやっている、生活問題にもなる(笑)、ということですか。

これはひさびさの論争ですよ。『新潮』という純文学雑誌に発表されたところにも、なにか裏はあるのではないかな。N 『中央公論』が、江藤の論文掲載を断ったのは、元編集長、粕谷一希が、自社の編集長であるので、まずいという中社社長がいったのをとらえて、江藤はこれは言論の弾圧であると批判している。そして他社にもちこむということ、『文芸春秋』にももちこんだが、こもまずいということ、『新潮』にのせたわけですね。これを現象的に追っていくと、今の出版ジャーナリズムの中では大変面白いゴシップです。

Y 江藤がつきつけていることは、非常にすると、こわいという一面と、数年後の日に左になつてしまったわけですね。N 江藤はもう少し深いところで、発言しているのではないですか。誰とはいませんが、批判されている何人かは、共産党の細胞の経験者なのです。この辺を江藤は最終的には、問題にするかもしれないですね。S 中川八洋が、江藤と組んで、自民党も共産党と同じく、左なのだと言いはじめていますね。

本思想状況を物語るのではないかという意味で、インテリとしては、避けては通れない関心事なのです。

江藤の言葉の使い方が、「ユダ」を使用しているのをみてもわかるように、大変きついですから、ある週刊誌で彼の主張を紹介する時、肝心なところは、複雑なので、カットした(笑) かったということですが、多くのボキャブラリーをもっていないと、江藤には立ち打てないですね。

保守論争で、革新が大敗した結果、革新の方が保守に近づこうとする、そのオポチュニストを、江藤は完膚なきまでに、非難をしています。最終的には、おまえの前歴は何だというところまで来るのだと思ふますよ。批判されている人たちは、共産党に替って

いたか、近い人ですね。中嶋嶺雄にしても、十年ぐらいい前は、左翼の論客だったのだでしょう。江藤がきびしいのは、こういう人たちが論壇のスペースを与えられていることだというのでしよう、彼には与えなくてね。(笑) この論争が、まともに続けられると、一方では改憲か護憲かという保守本質の論争になり、他方では、これらの論客たちの姿勢の問題になり、完全に内ゲバになります。N 行きすぎるとある種のマッカーシズムになる。

S 猪木、高坂、中嶋たちは、『自由』の立場そのものの人たちでしたね。一昔前、彼らは自分たちより左の連中と論争をしていたのですが、保守の論争後、保守全勝の結果、左の連中が右傾化し、これらの論客は自動的

に左になつてしまったわけですね。N 江藤はもう少し深いところで、発言しているのではないですか。誰とはいませんが、批判されている何人かは、共産党の細胞の経験者なのです。この辺を江藤は最終的には、問題にするかもしれないですね。S 中川八洋が、江藤と組んで、自民党も共産党と同じく、左なのだと言いはじめていますね。

論争は論争で、戦後のタブーにチャレンジするので、結構だと思ふのですが、これが論争として花を咲かせないで、変な感情論にいくと困ります。Y 江藤に批判された人たちは、週刊誌上で感想めいた反論ではなく、堂々と反論し、

自由選書

国会断罪・議員追想

松井政吉 著 元社会党総務局長

社会党の中核、また国会議員として、二十年におよび活躍した著者が、戦後三十年の国会汚職史、電電公社、NHKなど電波行政について語るととB6判
もに、熟知する河上丈太郎、三輪寿壯、河野密、浅沼稻次郎、鈴木茂三郎 一〇〇〇円
ら、社会党十六人の領袖たちの人柄、役割を評した社会党の一断面史。

裏方政治家
の語る秘話

総合雑誌「自由」発行元
自由社
東京都渋谷区渋谷1-1-19
〒150 渋谷東京72133

本音で決る時代の素顔

『今日の論壇』『土曜論壇』『日曜論壇』

(月～金, AM 7:15～30)

(土, AM 7:05～20)

(日, AM 7:05～20)

論壇陣/井上 茂信/藤山 成美/勝田 吉太郎/賀賀 健三/香山 健一/清水 幾太郎

曾野 明/那須 聖/西尾 幹二/福田 信之/武藤 光朗/村松 剛

提供: アデランス

(アイウエオ順)

『松原 正・世相を斬る』

(月～金, AM 8:35～55)

提供: 東横不動産・トヨタ勝又グループ



和田 春生の

『ニュースと論説』

(月～金, PM 9:30～10:00)

提供: 学生援護会

主張する 1422KHz



ラジオ日本

論争を深めてもらいたいですね。

K 関西系文化人の性格が気に入らないということはありませんか。サントリーとかP H Pとかのね。この系列の文化人は、けろっとして、戦後の歴史がどこかに行っちゃったごく語っていますからね。

N 要するに本音でいえば、関西系とか言わなくとも、売っている若手の評論家の人たちだと思ふのです。サントリーやP H Pが、金で彼らを集めたわけですね。結果として、関西グループを形成したが、東京の人も多く入っています。

こういう人たちは、江藤の後の世代として、売れてきた連中で、結果論でいえば、サントリーとかP H Pに集っている者だけが、稼いでいるのではないかと論理にもなるわけですね。(笑) 企業に寄り集ったとみえるのだけれども、企業が意識的に組織したのではなくて、売れている連中を金にあかして集めたのが、たまたま、そうだったという性格のものだと思うのです。

K この人たちは戦後の論壇の歴史がなかったごくに語るのですね。

N 彼らの奇妙な共通点は、六〇年安保と重要な時期に、全部外国にいたというこ

とです。だから本当に血を流した清水幾太郎とか、江藤が安保にとりこんでいた時期に、これらの人は日本にはいなかったのです。このところがスポンとぬけて、無傷で外国からもどってきた人たちで、なおかつ、国際的感覚を身につけており、高度成長の波に、なんの抵抗もなく乗れた。

K 彼等の感覚は、日本人ではないのではないかと、異質の人種ではないかという感じ、江藤は頭にきていたのではないかと。

N 江藤に批判された人たちは、全部、留学歴があり、海外で教授をやり、英語をうまくあやつることも共通ですね。

Y 日本人の悲しさで、どうしても生活の問題にいくのです。(笑)

S 右とか左とか決めつけないで、本誌上で論争をやってもいいね。

表紙のことば

「窓」
井原威知呂
明るい日差しに眼を向ける。花と鳥と若い娘がブルーホワイトの部屋に居て、静かである。心が揺らいで、語りかけたい親しみに溢れる。朝と昼と夜の窓は一刻熱気を帯びて人肌になる。

油彩 縦十四×横十八

編集後記

☆戦後政治の目見しが言われて久しい。その核となるのは、憲法と防衛の問題であることは言うまでもない。最近、江藤氏の発言をめぐって、論争が起る気配がある。その江藤氏を招いての「憲法と防衛」問題中心のシンポジウムの全記録を本誌に発表したい。半蔵に及んだ高橋教授の「日本の革新をどうすすめるか」とともに、賛否いろいろあると思われる。ぜひとも御意見を戴きたいと思う。

☆上杉論文「教育基本法改正への提言」も戦後教育を見直すためには、きけて通れぬ問題である。その教育現場からの具体的提言に対しても、御意見を聞きたい。

☆大山論文「北方領土は日本固有のもの」は、ソ連に見直しを迫るものといえよう。

☆好評の週刊誌記者座談会は、前述の戦後社会の見直しを、話題のニュースのなかから取りあげて戴いたものである。

☆暑中お見舞い申し上げます。(石原明記)

「自由」

編集者 定価 昭和五十八年九月
発行所 編集代表・加瀬英明 四四〇円
自由 社 電話 (四〇七) 一七八六
東京都渋谷区渋谷一丁目九 電話 (四〇七) 一七八六
郵便番号 一五〇 〇
半年 二、七〇〇円 (送料当社負担)
一年 五、四〇〇円